

第 17 回甲南英文学会定期総会・研究発表会のご案内

2001 年 5 月 31 日

甲南英文学会会長 有村兼彬

甲南英文学会会員各位

本年度の総会、および研究発表会・講演会を以下の要領で開催いたします。ぜひともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

記

日時：2001 年 6 月 23 日（土） 午後 12 時 30 分より

場所：甲南大学 2 号館

プログラム

12:30-13:50

総会（2 号館 2 階 224 教室）

- 議題
- 1 2000 年度決算報告
 - 2 2001 年度予算案
 - 3 規約改正について
 - 4 役員交代について
 - 5 その他
- 報告
- 1 編集委員会より
 - 2 その他

14:00-15:30

ワークショップ(2 号館 2 階 224 教室)

15:40-16:20

個別研究発表（2 号館 6 階 261・263 教室）

16:30-17:50

講演会（2 号館 2 階 224 教室）

河上 誓作氏（大阪大学教授）

「アイロニーとその周辺——外観と実態の言語学」

司会： 中島信夫氏（甲南大学）

18:00 --

懇親会（生協グリル）

- * 出席・欠席の旨は出欠表にて必ずお知らせください。欠席される方は、委任状に署名・捺印をお忘れなきよう、よろしくお願いいたします。
- * 本年度の役員会は、9 号館第 6 会議室にて午前 11:00 より開催予定です。役員の方は万障繰り合わせのうえ、ご出席をよろしくお願いいたします。
- * なお本年は三省堂、丸善の両書店が書籍販売いたします。（第 3 会議室）

報告要旨

<ワークショップ> (2号館2階224教室)

WH 移動について (On WH-Movement)

発表者：北峯裕士、古川武史、福田 稔

コーディネーター・司会：福田 稔

本ワークショップにおいて、上記3名の発表者が「WH 移動について」という統一テーマのもとに研究発表を行う。福田は WH 移動に課せられる制約に関する研究を発表する。北峯・古川氏は WH 句が複数存在する構文に関する研究を発表する。進行は次のように行う予定である。まず、福田が発表のトピックを簡潔に紹介し、福田、北峯・古川氏の順で発表を行う。その後、福田が発表の要旨をまとめる。

「島の効果について」

福田 稔 (帝塚山学院大学)

下接の条件 (Subjacency Condition) は移動 (取り分け、WH 移動) に課せられる一般制約として、数々の島の効果 (island effects) を説明してきた (Chomsky 1986 を参照)。しかし、最近のミニマリスト・プログラムにおいては、WH 島 (WH island) のみが取り上げられるだけで、複合名詞句制約 (Complex NP Constraint)、主語条件 (Subject Condition)、付加詞条件 (Adjunct Condition) などの条件に関わる強い島 (strong island) の効果は手付かずの状態にあると言っても過言ではない (Chomsky 1995 を参照)。そこで、本発表では、これらの条件を構造構築に課せられる一般条件から導くことができると提案する。

具体的には、統語部門 (syntax) は構造構築のための作業場 (workspace, WS) を提供すると仮定する (作業場に関しては Bobaljik 1995 を参照)。様々な派生が考えられるが本発表で中心となるのは、作業場 WS の統語構成物 SO が、別の作業場 WS' の統語構成物 SO' へ併合 (Merge) される場合である。この時、「WS' の SO' へ併合された SO の内部構造に、WS' での統語操作はアクセスできない」という制約が課せられる。この新しい提案によって、上記の3つの条件が統一的に説明できるようになる。また、この制約は、併合の前段階で行われる選択 (Select) という操作の性質から導かれると提案する。

参考文献

Bobaljik, D. Jonathan. 1995. In terms of merge: copy and head movement. MITWPL #27.

Chomsky, Noam. 1986. Barriers. MIT Press.

Chomsky, Noam. 1995. The minimalist program. MIT Press.

「多重疑問詞構文をめぐる」

北峯裕士 (北九州大学)

古川武史 (梅光学院大学)

英語の多重疑問詞疑問構文 (1) における文法性の違いは、1970 年代において優位性の条件 (Superiority Condition)、1980 年代には ECP (Empty Category Principle) を用いて説明がなされてきた。

- (1) a. Who bought what?
- b. *What who bought?

本発表では、まず最初に次の (2) のような例文をエレガントに説明している Lasnik & Saito (1992) の Operator Disjoint Condition (ODC) を検討し、その問題点を指摘する。

(2) Who wonders what who bought ?

最近、Pesetsky (2000) は、複数の指定部を要求する Cm-spec、Attract Closest (AC)、PF 規則を用いて、(1) のような優位性の効果を含め多重疑問詞構文を説明している。しかしながら、本発表では、Pesetsky の枠組みでは上の (2) のような例文を説明できないことを指摘し、代案を提示したいと思う。

参考文献

Lasnik, H., & M. Saito. (1992). Move α . Cambridge, Mass.: MIT Press.

Pesetsky, D. (2000) Phrasal movement and its kin. Cambridge, Mass.: MIT Press.

<研究発表> (2号館6階261教室)

Spenser の発音

—ME/a:/ の音価について—

平群秀信 (中京大学)

英語音韻史の中心的課題は音変化における各段階の「年代確定」という問題に集約され、数多くの音韻論学者が研究を重ね今日に至っている。音変化の過程もかなりの程度にまで分かっているものの、その細部に至っては依然として確定しがたいものが残っている。とりわけ GVS (Great Vowel Shift) に関し

I. GVS は push chain か pull chain (何時どの音韻から始まったか) という問題と

II. 1) ME/a/ > [a]、ME/° / > [e]、ME/u/ > [ʊ] の時期

2) ME/a :/ と ME/a i/ の融合時期、及びその融合音

3) ME/a i/ の発達過程

4) ME/a :/、ME/a i/、ME/° :/ の融合

5) ME/?u/ の発達過程

6) ME/? :/ と ME/?u/ の融合時期、及びその融合音

7) ME/au/ > [?:] の時期

8) ME/i :/ の発達過程(発達過程に [ei] を組み込むかどうか)

9) ME/u :/ の発達過程(発達過程に [ou] を組み込むかどうか)

が未解決の問題として残っている。

脚韻を古音価推定法の1つとして利用するには、各詩人に見いだされる脚韻を音声環境に基づいて分類すると共に、大母音推移が完了する1800年までの全詩人の脚韻のタイプ別頻度の変遷を調査する必要がある。このタイプ別頻度の変遷を踏まえれば、各時期の音韻の音形を決めることが可能である。これらの点に留意して、Spenser の脚韻を詳細に検討してみると、初期近代英語の音韻史の難問の1つとなっている ME/a :/、ME/a i/、ME/° :/ の融合に関して、ME/a :/、ME/a i/ と ME/° :/ の脚韻は見いだされるものの、その押韻率は極めて低い。しかも、ME/a :/、ME/a i/ と ME/° :/ の脚韻も殆どが押韻語の一方に相手方の音韻を持つ異形が併存するか、音美感に依存するかのどちらかであり、三者の融合の確証には成り得ないものであるという事実が浮かび上がってくる。Spenser の脚韻を異形・統計処理することにより、従来解明されなかった Spenser の発音に光明を見出すことが本発表の目的である。時間的余裕があれば Shakespeare の発音との違いについても言及するつもりである。

<研究発表>(2号館6階263教室)

Cantwellの死とRenata——*Across the River and into the Trees*

鷲尾順子 (甲南大学非常勤講師)

Ernest Hemingway の *Across the River and into the Trees*(1950)は *For Whom the Bell Tolls*(1940)の出版後久々に世に出た長編小説であったが、その評価は決して高いものとは言えなかった。その理由として、主人公 Cantwell 大佐の死に向けての語り口の単調さや、一見、受身に終始しがちな態度から生身の女性とは感じ取りにくい Renata の人間像といった様々な問題点が考えられる。その為か、Hemingway の長編小説の中ではこれまでこの作品を取り上げて論じることは比較的少ない傾向にあった。

一方で、この小説において作者 Hemingway の新たな試みが見られることもまた見落としてはならない。大佐の死までの三日間を描くにあたって、Hemingway は明らかに戦場や闘牛場といった場所で迎えるそれまでの”violent death”とは一線を画した死を表現しようとしているのである。もちろん、大佐の意識の中に戦場での記憶は常に存在し、また、Venice への旅そのものがそうした戦場の一つ、それもおそらくは彼にとって最初の戦場への「巡礼の旅」といった様相を呈しているのだから、戦争と切り離して考えることはできない。しかし、その死は予想された死であって、精神的な備えもあり、若くしての死でもない。彼の年齢はそれまでの主人公達と比べてもかなり高い方なのである。

Renata の果たす役割にも Maria や *A Farewell to Arms*(1929)の Catherine とは異なった視点が見うけられる。Renata は Cantwell との関係において客観性を保ちつづけているが、この客観性は彼女の非現実的な印象を誘う一因でもある。この非現実性によって、生きた女性としての魅力に乏しいと受けとめられる側面が強調されがちではあるが、時に大佐に光を指し示す存在として描かれることで、あるいは忍び寄る死の影を感じさせる姿で表現されながら、彼女は Cantwell の最後の日々を読み解くうえで重要な役割を果たしている。

今回は、Hemingway のこの小説における手法に注目しながら、Renata に象徴される様々なイメージの持つ意味を Cantwell 大佐の死と合わせて考察していきたい。